

- 三、葉の中肋の右に之れと平行の褐色の線がある。
四、葉身が狭長で暗緑色をして先端が鋭く尖つて居る。
- 三、同上のような線がない。
四、葉の先端が鋭く尖つて居ない。

アバカの品種は非常に多く、又全く同一の品種で、地方によつて、名称の異なるものもある。

この莖幹から取る繊維は粗剛であるが、長くて耐水性に富み、強力が強大であるから、船舶用網に用い、又眞田を編む、近時紙の原料にもするので前記の如く、数株を手に入れることが出来たから南洋パル株式会社農場に試作したが、栽植後約一年で稍成長した時に、同地を去つて、内地に帰つて来た爲、充分の成績も見ず、又全島は空襲を受け、引き続いて占領せられ、会社も解散したから繊維の採取にも至らず、多分今頃は荒地に野生の状態で残つて居ることかと思う。

汀の貝殻について

神戸市立楠丘高校 安藤保二

地質学の講義でこんなことを聞いた、「地層が垂直に立つ場合に如何にして上下を知るか、その時は化石の貝の向き方が一つの根據になる、つまり貝殻が汀に打上つて堆積する場合は下向きが多い」と云うのである。

右の説について納得の行かぬ点があるので之れる試めして見た。貝はサルボウで採集は前夜に風波の高い早朝を選た、大体百米の間の汀線で採集記録した、データは次の通り

第1回、堺市助松海岸(7.30.1948) 上向119個, 46.12%, 下向139個, 53.88%

第2回、洲本市大浜海岸(8.11.1948) 上向92個, 41.82%, 下向128個, 58.18%

上の様に前説は幾分、当を得て下向きが稍々多い、然し全然貝は下向きに堆積することは無謀であろう。従つて貝の向き方で地層の正逆を論ずる事は不可能である。上はサルボウと云う一種の貝に就いてであり、たゞ2回の調査である故更に再調査を必要とするが諸賢の叱正を待つ。(8.25.1948)